



ピアサポートと学習支援 : 1. 北海道大学と東北大学での面接調査をもとに

米谷, 淳
山内, 乾史

(Citation)

大學教育研究, 28:87-100

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012095>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012095>



ピアサポートと学習支援

ー1. 北海道大学と東北大学での面接調査をもとにー¹

Peer Support and Learning Support:

1. Interview Survey in Hokkaido University and Tohoku University

米谷 淳 (神戸大学 大学教育推進機構 教授)

山内 乾史 (神戸大学 大学教育推進機構 教授)

要旨

大学でピアサポーターがするピアサポートには「なんでも相談」のようなものから補習や質問受付のような学習支援までが含まれる。本稿では、北海道大学と東北大学で行ったインタビューをもとにピアサポートと学習支援との関係について考察した。インタビューした部署は、学生相談の一部としてピアサポートを行なっているところ、総合入試で入学した1年生が2年次に学部移行するための情報提供と助言を専任のスタッフが行なっている傍で大学院生が1年生からの質問を受け付けているところ、学部生と大学院生が自律的に数学、物理学、化学、英文ライティングに関する個人指導と英語やアカデミックスキルのセミナーを行なっているところと、三者三様の性格をもっており、それぞれに長所と短所があるが、それぞれの役割をしっかりと果たしている。いずれも、総合入試制度やアクティブラーニング促進や「学生同士の学び合いの力」の活用など、各大学の課題や目標や学風に適合している。つまり、ピアサポーターによる学生支援と学習支援が、連携しつつ上手く棲み分けることにより、学生支援と学習支援の混在化がますます進む状況の中で、優れた学生支援となっていることがうかがえる。

1. はじめに

一般に「学生生活上で支援（援助）を必要とする学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」（日本学生支援機構, 2009）と定義される（小貫, 2011: 63）ピアサポートにはいくつかの種類がある²。早坂（2010）のように、「ピア・サポータ

¹ 本研究は山内が取得した日本学術振興会の科学研究費補助金の基盤研究(C)「2018 年度～2021 年度「研究大学における持続可能な学修支援のあり方についての日中豪三国の比較研究」（課題番号 18K22726）の研究成果の一環である。

² 早坂（2010）は、全国の大学のピアサポートの類型を、ピアサポーターが相談相手になる「相談室型」、学習支援者になる「修学支援型」、とくに入学直後に新入生の良き先輩になる「新入生支援型」、看護学生が高校生に健康管理や病気予防などの指導をしたりする「その他」に分類している。筆者はそれらに加え、愛媛大学（秦, 2010）や大阪女学院大学（浅田, 2010）や山口県立大学（大石, 2010）のように、ピアサポート活動をピアサポーター自身のチームワーク力やリーダーとしての資質を向上させる学習機会とみなす「リーダーシップ訓練型」があると考えている。

一として訓練を受けた者が自覚をもって仲間を支援・援助する」ものであると限定したり、中野ら（2017）のように「学校教育活動の一環として、教師の指導・援助の下に、子どもたちが互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育むために行う学習活動」と定義して「教育の一つの方法でもある」（早坂, 2010: 196）とみなしたりするものもある。また、川島（2010）は、ピアサポートを学生の「モチベーションや学習に取り組む積極的な態度を、その相互関係の中で高めていこうとする試み」のひとつとしている。山田（2011）は川島（2010）の立場から、いくつかの大学でなされているピアサポートを「大学教育の新たな可能性」として紹介している。

このような広がりはあるものの、日本の大学におけるピアサポートは「学生支援の一環」であり、学生が学生に行う「気軽な」相談であることが多い。もっとも、ピアサポートはカウンセリングではない。英国ではピアサポーターがカウンセラーの専門家であるかのような誤解を避けるために、ピアサポートの同意語として使われることのある「ピアカウンセリング（peer counseling）」の代わりに「ピアリスニング（peer listening）」という表現が用いられている（The Mental Health Foundation, 2002）。

一方、ピアサポート研究の第一人者といわれるトレバー・コール（2002）がまとめた『ピア・サポート実践マニュアル』³には、ピアサポーターの役割として真っ先にチューター（学習支援者）としての役割が挙げられている⁴。また、Newton et al.（2002）はピアサポーターを「ピアエデュケーター（peer educator）」と呼び、それはピアカウンセラー、級長、ピアコーチ、ピアメンター、SA（Student Assistant）、チューター等の総称だと述べている。十分なレディネスのないまま大学に入学したり、成績不振に悩んだり、休学明けで不安を抱えたりといった学習上の問題を抱える学生を対象とする学習支援は、伝統的に大学教員が果たすべき役割の一つとなってきた（谷川, 2017）が、日本でも学習支援をピアサポーターがしているところがある。吉武・池田（2004）は、20年前、東北大学の学生相談所に勉強で悩む一人の工学部学生の来談をきっかけに学生ボランティアによる「補習ピア・サポート」が始まり、「翌年から、工学部・工学研究科は、補習を必要とする一年次学生、休学後の復学挑戦学生や単位取得不良生への対応として、学生相談所カウンセラーと協働しての大学院生「TA 修学アドバイザー」が予算化」（p.55）し、彼らがピアサポーターとして活躍するようになったと述べている。このように学生の学習支援をする大学院生・学部生をピアサポーターとして雇っている大学もある。また、立命館大学のように広い意味での大学の学習支援や教育支援を、訓練を受けた多数のピアサポーターが手伝っているところもある（沖, 2015）。

³ このマニュアルはピアサポートを学校（小中高）での「子ども同士の助け合い」、すなわち生徒の活動と定義している。

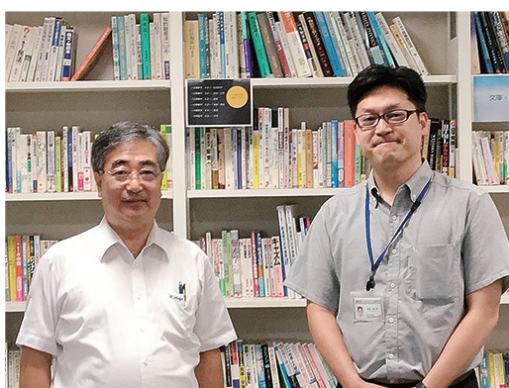
⁴ また、生徒を対象としたグループ・カウンセリングにおいて「スクールカウンセラーと一緒にグループの共同リーダー」（p.8）を務めることもピアサポーターのひとつの役割として挙げている。

現在、東北大学には学習支援センターがあり、そこでは SLA (Student Learning Advisor) と呼ばれる大学院生・学部生が学生の物理学、数学、化学、ライティングに関する質問を受け付けたり、英会話やアカデミック・スキルに関するセミナーを行ったりしている。北海道大学では履修相談や学習支援をする部署を「ラーニングサポート室」と呼んでおり、そこでは博士号をもつ専門職員が総合入試で入学した1年生の履修相談や、物理学、数学、化学に関する補習やアカデミック・スキルに関するセミナーを企画・実施している他、大学院生が TA となって1年生の学習相談に個別に応じている。

このように、ピアサポーターが提供するピアサポートには「なんでも相談」から補習や個別学習相談や集団を対象としたアカデミックスキルセミナーといった学習支援までが含まれる。本稿ではピアサポートの今後のあり方を考える足場づくりのひとつとして、北海道大学の「ピアサポートルーム」でピアサポーターが提供しているピアサポートと留学生サポート・デスクでピアサポーターが提供している留学生サポート、北海道大学ラーニングサポートオフィスで専門職員と大学院生 TA が提供している学習支援、東北大学学習支援センターで SLA が提供している学習支援を、それぞれの関係者へのインタビューと資料をもとに比較し、それぞれの特徴を考察する。

2. 北海道大学学生相談総合センターにおけるピアサポート

2019年8月20日、われわれは北海道大学学生相談総合センターがある学生交流センターと呼ばれる建物の2階に行き、副センター長 齋藤暢一朗准教授、留学生相談室長 ラフエイ・ミシエル准教授、菅原嘉奈子事務係長、武田晶子カウンセラーにインタビューをした。以下にインタビューを要約する。



左：北海道大学ピアサポートルーム（左：米谷、右：齋藤副センター長・学生相談室長）

右：北海道大学学生相談総合センター（左：原事務補佐員、右：ラフエイ・ミシエル留学生相談室長）



留学生サポート・デスク

学生支援の統合

学生支援は学務部学生支援課が担当しており、ピアサポーターの管理もそこでしている。北大では従来、留学生支援や国際交流は国際部と学務部が別々に担当してきたが、去年から学生支援課に一本化された。去年できた学生相談総合センターにはアクセシビリティ支援部門、学生相談部門、留学生相談部門の3つが置かれている。ピアサポーターが勤務するピアサポートルームは学生相談部門に、留学生が務める留学生サポート・デスクは留学生相談部門にある。

学生相談については最初から保健センターと学生相談室の2本立てで、学内でも混乱があった。改革前の保健センターには教員カウンセラーと技術職のカウンセラーが合わせて5人いた。そこは基本的に医療組織であり、学生がセンターを利用した時は必ず精神科医が診察し、カウンセリングが適当と判断すれば治療の一環としてカウンセラーによるカウンセリングが行われる。いわゆる、クリニック・モデルである。それとは別に学生相談室が、ほぼそとと学内の一室で営まれてきた。そこには学内から兼務として委嘱されている臨床心理士がいて、自由に学生生活一般も含めてありとあらゆる相談に応じていた。この2つがずっと同時並行的に続いていた。齋藤准教授自身も保健センターに所属しており、学生相談室を兼務する形になっていた。そうした中で、情報管理の問題、組織上の問題に関して、学生から見てわかりにくいという事情があった。そこで、この問題の解消を図ることを兼ねて、教員としても独立して、組織としても他から独立してやっていこうということになり、カウンセラーは皆、学生相談総合センターに所属することになった。そこには2人のカウンセラーが英語と日本語で留学生のカウンセリング(international counseling)をしている。一方、主に外国人留学生の日本における生活の支援を行なっている留学生サポート・デスクはもともと留学生センターにあった。

学生相談部門ピアサポートのピアサポーター

ピアサポーターは有償である。TAとは異なるが、事務職員として上限5年で雇ってい

る。学生相談部門のピアサポーターは、昔は2年生以上だったのだが、今は1年の後期から応募できる。基本的には年度ごと4月に更新する。雇い止めの関係で雇用期間は5年間が上限であり、職員規定の関係でTAなど他の業務についた期間も含める。

選考方法は部門によって違う。学生相談部門は、事前に宿題のようなものやってもらい、それから学生相談室が面接をし、採用された学生に研修をする。⁵そのあとはシフトに入って、必要に応じて知識や技能を学ぶ。ピアサポーターとなるための条件は北大生であることである。大学院の前期課程でも後期課程でもよい。ピアサポーターの経験によって時給が変わる。

学生相談部門のピアサポート定員は今のところ固定していない。だいたい20名から多い時には25～30名にまでなることもある。定員ではなくシフトのコマ数によって採用数が変わるのである。シフトのコマ数が決まっており、ピアサポーターがそれにどの程度入れるかで予算が決まる。ピアサポートのシフトは、授業期間は毎日4時間15分、月～金の週5日、ピアサポートルームを開けている。夏休みは閉室している。各ピアサポーターは毎週1～2時間勤務している。同じ時間帯に2人が勤務する。会議や研修は別に時間給を支払っている。基本的には毎年更新であり、本人の希望によりほぼ自動的に更新される。

無断欠勤する者もいるが、それを許しているわけではない。学生同士で「きちんとやろうね」と互いに言い合う雰囲気が見られる。遅刻する時も前もって理由を言って届けるように学生同士できちんとしようとしている。

留学生サポート・デスクのピアサポーター

留学生サポート・デスクのピアサポーターとなる留学生と日本人学生の選考方法としては、応募書（志望動機を英語と日本語で記入してもらうもの）を提出後にグループ面接を実施している。先日は、室長と事務職員と、すでに経験のある留学生サポート・デスクサポーターの3人でグループ面接を実施した。具体的には、3～4人の応募者を1つのグループにして、課題を与えて20分ぐらい討議をさせる。課題は3つの中から選ばせた。例えば「サポート・デスクはどういうイベントをやればよいか」といった課題である。時間の半分は英語で話し、残りの半分は日本語で話す。討議中のグループダイナミックスと英語と日本語の能力をもとに評価し、その後、一人ひとりに質問をして、それに対する応答も評価の対象になる。定員は20人であり、9月に3人が卒業して、1人退職16人になったので、採用は来年する予定である。センターのひとつの部門になる前は、採用は年2回行っていたが、センターになってからはまだやっていない。年1回やるか、必要な時だけやるか、まだ決めていない。採用の基本は欠員補充である。

留学生サポート・デスクでは、シフトの変更が本当に多い。それで留学生サポート・デ

⁵ 東京大学学生相談室もピアサポートの支援を相談室のエンパワーメントのひとつとしている（高野・大森, 2004）。

スクではFacebook上でシフト管理をしている。事務がそのシステムを管理している。遅刻や変更はFacebookで届け、事務職員がそれをもとにサポーターの給与計算をしている。学生相談部門ではピアサポーターどうしでメーリングリストを使って連絡・調整をしている。勤務日には出勤簿に捺印させ、毎日業務終了時に相談票を提出させている。留学生サポート・デスクではPC上で相談票に英語で記入させている。それを打ち出して毎月の状況をチェックしている。他方、学生相談部門の相談票は紙であり、内容をPCに入力してデータとして保管している。それをもとにピアサポーターが統計をとり、毎月の傾向を調べたりしている。イベントとしては、例えば「ランゲージ・コーナー」は毎週火・金に開催して、ゲームをやったりトークングをしたりしている。月に1回、「茶話会」をやっている。先週9日には、流しそうめんのイベントを催した。流しそうめんセットを買ってきて、1階のロビーでやったが、40名ほどが集まり、とても盛り上がった。

学習支援と学生相談

当初、学習支援と学生相談を一本化するというアイディアも出された。しかし、学習支援は教育推進課や入試や学部学科のカリキュラムを担当する別のセクションにぶら下がっており、他方、学生相談は学生支援課が担当することになったので、統合するとなるとそれらの線引きをどこでするのが難しかったのではないかと考えられる。学習支援部門と学生相談部門は結構連携していて、互いの企画についてそれぞれ話し合いをしており、結局、来談する学生の半分は学業で困っているの、日頃からよくラーニングサポート室に情報を提供して一緒に支援している。

ピアサポート室の立ち上げ期には、結構な数の学生が来て活動が盛んだったが、しばらくすると「前やっていたから今年も」といった感じになり、モチベーションもクオリティーもだんだん落ちてくる。そうした状況もあり、テコ入れをする必要があった。昨年8月のセンター化により大きく変化した。学生相談部門においても留学生支援部門においても、給与が支払われているということもあり、応募者が少なくて困るという事態にはなっていない。学生相談部門では提供しているサポートの中身が「糊を貸してください」、「ハサミを貸してください」といったレベルになってしまった。単に給与がもらえるからということでピアサポーターをやっている学生は別として、ピアサポーターらしいサポートをしたい学生がもっと活躍できるように、「部屋にいらなくてもいいよ」といった話もしている。学生相談室と連携してグループ活動をやったりもしている。

ピアサポートルームが設置されたきっかけについては、ちょうど、設置された時が入試制度改革により総合入試が始まる頃だった。総合入試となることで、「情報難民」の学生が出てくることが予想されたので、教育・入試担当理事がピアサポートをラーニングサポートとあわせて始めようということで設置された。だから、予算も新たに確保できた。

北大のピアサポート室はこれまで学生相談的な組織というよりは、教務を補助するよう

な役割が期待されていた。⁶ラーニングサポート室ができて、そこが正確な情報を伝えるという役割になった。ピアサポーターがやっていた助言・指導は下手をすると誤った情報を与えることになってしまうので、今ではしていない。履修指導をピアサポーターはしないことになった。組織が分化されて役割分担が明確になり、ピアサポート室は学生相談的な役割をより期待するようになっていく。なお、来談者が毎年減少していたので、昨年度からは総合入試で入った1年生が2年次に学部に移行することに関する情報提供をするようにしたところ、来談者数が回復した。

3. 北海道大学ラーニングサポート室における学習支援

前述した学生相談総合センターでインタビューした翌日、われわれはそこから歩いてすぐのところにあるラーニングサポート室を訪ね、ラーニングサポート室長である細川敏幸教授と立花優特定専門職員にインタビューを行った。以下にインタビューを要約する。



写真 細川ラーニングサポート室長（右）と立花特定専門職員（左）

総合入試で入ってきた1年生が学部へ移行するための支援

2012年から総合入試が始まった。入学総数約2600人のうち約1100人が総合入試による入学者である。およそ文系100人、理系1000人である。総合入試で入ってきた1年生は全員が総合教育部に所属し、2年生になる前にどの学部・学科に行くか決めないといけない。医学部も窓口を開いており、獣医学部や歯学部も総合入試で入った学生も行けるようになっている。人気の高いところに行くにはよい成績をとらないといけない。そのため、進路指導と学習指導が必要になるだろうということでここが設置された。当初は博士号をもつ専任職員が6人いたが、今では予算削減のため4人になっている。

ラーニングサポート室は総合入試開始時期に設置されたが、当初は別な場所にあった。

⁶ 北大のピアサポート室の立ち上げについては、岡本（2011）を参照されたい。

他の学生の目につかない方が良いだろうということで少し奥まったところに設置したが、来る学生が少ないということで、1年生がよく通る導線に接した今の場所に移った。それからは結構利用されるようになった。年間利用者は、延べ人数で、進路指導が800人ぐらい、学習指導は3000人ぐらいである。

進路指導も学習指導も専任教員が6人いたときには2～3年生も受け付けていたが、4人となってからは原則として総合教育部の1年生だけにしている。転部の相談もここで受け付けている。総合入試の場合、文系から理系への進学、理系から文系への進学もできる。そうした「他系移行」の相談も受け付けている。「他系移行」は、各学部・学科・コース振分定員の約1割である。進路指導のほとんどが学部選択に関するものであり、そのためにラーニングサポート室では毎年、あることを研究するにはどの学部・学科・コースに行けばよいかをマップにした冊子を作成して教員と学生に配布している。例えば、人気の高い生物系の分子生物学を学びたいという場合は、それができるところは競争の激しい農学部や薬学部だけでなく、工学部にもあるし、水産学部にもあるということを学生に知ってもらうために、そうした冊子を作った。キーワードで行きたい学部・学科・コースが検索できるようにしている。

移行については、毎年9月に学部・学科・コースの紹介を行い、意向調査を実施している。それへの回答は学生の義務ではない。その後、翌年の2月に希望を出させて振り分けをする。さらに残った学生の振り分けを行う。最後は3月末になる。最後まで残る学生は10人程度である。

専任職員と大学院生 TA による学習指導

とくに未修者のために物理学や数学について博士号を持つ専任職員がレポートの書き方についてのセミナーや高校物理未修者のための補講をしている。以前、アカデミックスキルセミナーとして研究の仕方などを取り扱ったことがあるが、今はしていない。別なアカデミックスキルセミナーは定期的に開催しており、それをまとめたものや全学教育科目の



写真 スタンドに入った手作りシート

物理学の内容を解説するシート（学習教材）が何種類かラーニングサポート室の前に置いてあり、学生が自由に持っていけるようにしている。個別学習相談では、主に物理学、数学、化学の学習指導をしている。

2 年次進級に必要な 32 単位以上を取得していても、全学教育科目をもう少し取らないと卒業要件は満たさない。進級条件を満たせずに留年する学生が数名いる。ここは学習塾のように成績アップを図るための場ではなく、高校で物理未修だった学生を集めた補講やアカデミックスキルに関するセミナーを開催したり、個人的な学習相談として授業や自習で解こうとした問題についての質問に応じたりすることで、個々の学生に自学自習の姿勢を見につけてもらうことを目的としている。現在のラーニングサポート室のキャパシティーは不足しており、それだけでオーバーフローしている。

4. 東北大学学習支援センターにおける学習支援

北海道大学ラーニングサポート室を訪れた翌日、われわれは東北大学学習支援センターを訪れた。以下にインタビューを要約する。

組織について

学習支援センター（以下、「センター」と略す）が配置されている高度教養教育機構（以下、「機構」と略す）は、2014 年 4 月に、入試センター、キャリア教育支援センターの他、高等教育開発推進センター、国際交流センター、国際教育院、グローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション博士人財育成センターの改組等により、11 の業務センターを配置する組織として発足した。学習支援センターは、この 11 ある業務センターの 1 つである。

学習支援センターは、東北大学の全学教育課程（教養教育課程）に関する学生の学修および授業外・課外の自主的な学習を支援することを使命としている。センターの教員のうち、センター長を除く 3 名の教員は、機構内の高等教育開発部門の所属となっている（センター長は学習支援センターの専任教員ではなく、他のセンターとの兼務となっている）。センターの予算としては、機構内の予算からも既定経費を充当されているが、SLA サポート事業を運用するための主な予算は全学的基盤経費として大学より措置されている。

SLA サポート事業の運営について

センターの場所は地下鉄川内駅から徒歩すぐ、マルチメディア教育情報館 1 階にある。学習支援センターのあるフロアはラウンジとなっており、飲食 OK、おしゃべり OK のフリースペースである。

相談件数として最も多いのは、理系科目である。SLA としても理系科目担当の SLA が多い。リメディアル教育としてのみならず、授業で扱われる内容よりも発展的な内容につ

いて学びたい学生の支援も行っている。

近年は、留学生向けの学習支援を重点化している。以前から SLA (Student Learning Advisor) として留学生も採用しているが、英会話担当の SLA として主に国内学生の支援に従事している。留学生に向けた支援としては、近年、留学生向けの日本語会話支援にも取り組んでいる。

センターでは、ライティング支援も行っている。センターのライティング支援は個別対応を基本としている。東北大学には、『東北大学レポート指南書』という、独自のライティング教材があり、入学時に新入生全員に配布している。この教材そのものは、機構教員および附属図書館職員よりなるプロジェクト・チームで開発・作製され、学務審議会と機構の発行となっている。センターでは、この教材におおよそ準拠する形で、主には 4 月～5 月の時期に新入生を対象として、セミナーを実施している。

SLA (学部 3 年～D3) は TA と同じ待遇の非常勤職員 (半年の任期で最長 5 年まで更新) である。予算定員は現在 43 人ある。勤続年数は平均 1 年半である。多くの SLA はシフト制で勤務し、概ね毎週 2 コマ (3 時間) 勤務が多い。

対応時間については、来談者 1 人に 30～45 分を目安としている。SLA のシフト作成やコマ数の調整は助教と事務職員が担当している。SLA サポート窓口の開設時間の総数は基本的には予算次第である。試験期間前は物理学・数学はなるべく 2 名ずつのシフトにしている。休日や長期休暇期間は相談窓口は閉室している。

センターのホームページは事務職員が管理しているが、各担当の専門的な内容については SLA が文案を作成する。出勤管理は事務職員が行なっている。採用後、最初は先輩 SLA について個別指導のやり方を見てもらい、その後先輩 SLA が付き添いながら個別指導を始める。また、SLA 全員が参加する「活動説明会」に出席する他、SLA 同士で随時実施している研修会に参加して情報交換や問題共有をしている。新人 SLA にはメンター制があり、ベテラン SLA についてもらっている。

学生が相談に来る際、毎回、学生本人と SLA がカルテを記す。SLA の学生対応に関する研修の一環としては、カルテをもとにメンターが新任 SLA に指導・助言することもある。カルテの情報は SLA で共有している。SLA と教員 (助教) との面談は半年に 1 回である。辞めることが決まった SLA にはインタビューをして、センターや SLA について話を聞いている。

SLA サポートの学生における意義

おそらく学生にとっては教員より学生 (SLA) の方が聞きやすい。「こういう質問を先生に聞いてもよいだろうか」と躊躇する学生も少なくないように思われる。同じ学生同士なので、心理的な面で親しみやすさや質問しやすい雰囲気がある。SLA が目指しているのは、先輩 (学生同士) だからこそできる学習支援である。

毎年、どの時期にどんな質問が多いかについて一定の傾向がある。センターには学生のニーズがあり、個別指導の効果もある。センターにある各部会は、当該科目に関する専門性を有する教員から直接に研修を受ける体制にはなっておらず、部会の中でメンター制をとり、先輩が新人 SLA を指導している他、研修会等で相互に学び合っている。

5. おわりに

以上、インタビューした部署は、学生相談の一部としてピアサポートを行なっているところ、総合入試で入学した1年生が2年次に学部に移行するための進路選択のための情報提供や助言を専任のスタッフが行なっている傍で大学院 TA が1年生からの質問を受け付けているところ、学部生と大学院生が数学、物理学、化学に関する質問受付やアカデミックスキルセミナーや英会話実習を行なっているところと、三者三様の性格をもっている。

それぞれ長所と短所がある。ピアサポートを学生による自主的な運営で行えば、予算も教職員の手間もあまりかからないだけでなく、学生が相談に来やすくなる他、ピアサポーターが実践力や自立心を養う試練の場となるという長所がある一方、規律が緩くなったりサービスがマンネリ化したりして、ピアサポーターのモチベーションが低下しやすい⁷という短所がある。これに対して、教職員が管理・統制し、リーダーシップを発揮してピアサポーターを管理・指導したり自ら学生支援（学生相談）や学習支援（学習相談）をしたりする傍らでピアサポーターにピアサポートさせるなら、きめ細かく、より専門性の高い指導・支援ができ、学生にはさせられないカウンセリングや進路指導ができるという長所がある一方、10倍以上の人件費がかかり、予算削減によって十分なスタッフの維持が困難になりやすいという短所がある。

しかし、訪問調査と資料から、いずれもそれぞれの役割をしっかりと果たしていることがうかがえた。すなわち、総合入試制度やアクティブラーニング促進や「学生同士の学び合いの力」の育成など、各大学の課題や目標や学風に適合し、ピアサポーターによる学生支援と学習支援が相互に連携しつつ上手く棲み分けることで、学生相談と学習相談の混在化がますます進む状況の中で、優れた学生支援となっている。以下に、これについて少し論じる。

それらは全て、学生同士が助け合うというピアサポート本来の趣旨に沿っており、学生が学生に相談したり質問したりすることの気やすさや気軽さや、現役学生ならではの視点から役立つ情報や辛いところに手が届くサポートが受けられるという利点を生かしている。前述したように3つの部署でのピアサポーターの業務は「何でも相談」、個別学習相談、個別学習相談とセミナーと異なる。採用ではどれも面接があるとはいえ、レポートや試験を課すものからピアサポーターの推薦・紹介に基づくものまである。また、どれも事前研修

⁷ こうした事例については福田・土岐（2014）を参照されたい。

を課す他に定期的に研修をしているが、見習い期間があるものもあれば、特に設けていないものもある。それは、ピアサポーターが北海道大学のようにカウンセラーや博士号を有する専門職員の監督・指導の下で業務をしているか、東北大学のように分野ごとに先輩学生 (SLA) から指導・助言を受けながら新人が OJT で仕事を覚えていくかの違いによると考える。

もちろん、予算の規模もピアサポートや学習支援についての学内における位置づけも大きく異なると考える。北海道大学ラーニングサポート室は、北海道大学が総合入試の定員枠を設けて、1100 人あまりの 1 年生を文系・理系の大批りで受け入れ、1 年時の成績により学部・学科・コースを振り分けるという **late specialization** 方式を導入したことに伴い設置された。そして、前述したように、障害学生や留学生を含む学生からの相談を大学が総合的にサポートすることを目指して学生相談総合センターを作り、以前はどちらかと言えば教務的サポートを主にしていたピアサポートを「なんでも相談」を中心にするように切り替えた。一方、ラーニングサポート室ではその 1 年生の、特に未修者を対象とする物理学、数学、化学の補修やそれらの科目の個別学習指導は学位をもつ 4 名の専門職員が行っており、17 名の TA も個別学習指導を補佐しているものの、その予算のほとんどは専門職員の人件費であり、TA 経費はその 10 分の 1 であるという。また、学生相談室には 5 名のカウンセラーが務めており、学生相談部門ピアサポーターは学生生活に関する簡単な質問に対応するだけであり、カウンセラーの補助的な役割である。

これに対して、東北大学ラーニングサポート室は 2 名の学位をもつ助教と 1 名の事務職員のほか、40 名を超える SLA が配置されている。ホームページに「学生同士の学び合い (先輩学生と後輩学生の教え-学び合いも含む) の力を活かして、リメディアル支援からレベルアップ支援まで幅広い学習活動を行っています。」⁸と書いているように、学生同士の自主的な「学び合い」あるいは「共同研究」という東北大学が伝統的に受け継いできた学風とでも言えるもの⁹を尊重し、SLA が学習支援を主導している。

北海道大学も東北大学もそれぞれの仕方で学生生活上の悩みを抱える学生の支援と学習上、進路上のことで質問に来る学生の支援をしている。予算も人的資源も限られており、選択と集中が求められる中、それぞれの大学の特色を生かすべく工夫している。特に、最近では学習相談と学生相談の線引きが難しくなっており、学習支援と学生支援の混在化が促進していく兆しがある。こうした今、それらの連携をとりつつ、無駄を省き、しかも相乗効果を発揮する仕組みを整えていくことがますます求められていると考える。

⁸ <http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/outline> (最終アクセス：2020 年 1 月 20 日)

⁹ 東北大学文学部心理科学研究科のモットーのひとつが「共同研究」である。

<https://www2.sal.tohoku.ac.jp/psychology/index-j.html> (最終アクセス：2020 年 1 月 21 日)

参考文献

- 浅田晋太郎 (2010) 「リーダーシップトレーニングの試み」『大学と学生』第 80 号、pp. 55-60.
- 大石由紀子 (2010) 「高等教育におけるピア・サポート導入の教育的効果と期待」『大学と学生』第 87 号、pp.16-21.
- 岡本健 (2011) 「北海道大学ピア・サポートの誕生と展開：つながり創出型ピア・サポートの提案」『北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成 22 年度版）』、pp.5-25.
- 沖裕貴 (2015) 「「学生スタッフ」の育成の課題-新たな学生参画のカテゴリーを目指して」『名古屋高等教育研究』第 15 号、pp.5-22.
- 小貫有紀子 (2011) 「ピア・サポートの現状と課題-ピア・サポートの拡大と多様化-」日本学生支援機構『学生支援の現代的展開』、pp.63-77.
- 川島啓二 (2010) 「大学教育の革新と FD の新展開」『国立教育政策研究所紀要』第 139 号、pp.9-20.
- コール,T. (2002) バーンズ亀山静子・矢部文訳『ピア・サポート実践マニュアル』川島書店
- 高野明・大森拓哉 (2004) 「国立大学総合大学における学生相談の展開と課題～東京大学における学生相談 50 年～」『大学と学生』第 2 号、pp.42-48.
- 谷川裕稔 (2017) 『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』ナカニシヤ出版
- 日本学生支援機構 (2009) 『大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について』調査報告
- 秦敬治 (2010) 「学生支援の新たな試み～愛媛大学リーダーズ・スクール (ELS)」『大学と学生』第 87 号、pp. 44-48.
- 早坂浩志 (2010) 「ピア・サポートへの取り組み」日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編)『学生相談ハンドブック』学苑社、pp.196-201.
- 福田今日子・土岐智賀子 (2014) 「ピア・サポーターの育成・マネジメント-産業社会学部デジタル工房学生スタッフ D-plus の事例から-」『立命館高等教育研究』第 15 号、pp.195-211.
- 山田剛史 (2010) 「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」『大学と学生』第 87 号、pp.6-15.
- Kracen, A. (2003) “Peer Support Training Manual” Student Counselling Service, Trinity College Dublin.
https://www.tcd.ie/Student_Counselling/studentlearning/assets/docs/old/Peer_Support_Training_Manual.pdf (最終アクセス：2020 年 1 月 20 日)
- Peer Programs Network (2019) “Peer Program Toolkit: Starting, Coordinating and Evaluating Peer Programs at McGill University” Campus Life & Engagement, McGill University; Montreal,

Quebec.

https://www.mcgill.ca/peerprograms/files/peerprograms/toolkit_dec_2_update_0.pdf (最終アクセス : 2020 年 1 月 20 日)

The Mental Health Foundation (2002) “Peer Support Manual: A Guide to Setting up a Peer Listening Project in Education Settings” <https://www.mentalhealth.org.uk/sites/default/files/peer-support-combined.pdf> (最終アクセス : 2020 年 1 月 20 日)